

空は青かった

塚田 實

昨年三月人間ドックを受けると、「すべてほぼ良好ですが、左眼の白内障が進んでいるので、眼科の再検査をお勧めします」と言われた。早速眼科を訪れると「もう少し様子をみましょうか。三ヶ月後また来てください」との診断、ところが新型「ロナ」が蔓延し訪問をためらっていると一年過ぎた。今年の間ドックでは、「白内障がかなり進んでいますね。左眼は半分見えていないのではありませんか。すぐに眼科に診てもらってください」と指摘され、直ちに眼科に予約を入れた。先生は「これは直ぐ白内障手術をしましょう。十五分位の簡単な手術です」とおっしゃり、テキパキとスケジュールを決めた。

白内障手術は二人の先生による十五分位の手術で、無事終えた。「一日だけ眼帯を付けてもらいます。一週間は頭と顔を洗わないように」

翌日外来で眼帯を外した。ゆっくりと眼を開ける。「えっ、世の中こんなに明るかったのか」。新鮮な驚きだった。術後は三種類の目薬をそれぞれ一日四回さして快復に努めた。一週間後の検診を経て、更に二週間後完全に治癒・安定したと診断され、眼鏡を処方して頂いた。

術後の夕方、二階のベランダに干してある洗濯物を取り込んでいた。取り込んだ後、しばらく空を眺める。「素晴らしいスカイブルーだ。こんなに空をゆっくり見るのは久しぶりだ。沖縄以来だな」

八年前の六月二十四日沖縄県糸満市の「平和の礎」を訪れた。前日の二十三日が沖縄戦終結の日で、この日を「慰霊の日」と定め、一九九五年に戦後五十周年を記念して平和の礎を建設した。国籍を問わず、約二十四万人の沖縄戦犠牲者の名前が刻まれ、石碑の間を歩くと万感の思いが迫る。広場の真ん中に「平和の火」が灯され、そこから海に目を向けると南国のスカイブルーとマリンブルーが水平線を挟んで青を競い合っていた。

「また行きたいな」。ベランダで八年前のことに思いを馳せしていると、涼やかな風が頬を撫で、我に返った。